地域における福祉の推進 [障害]

障がい児への理解を深める地域の保育所との 交流保育

施設内において幼児教育の必要性を実感し、独自の保育を開始した。その中で、障がい児が抱える現状を伝えたいという気持ちから、地域の保育所との交流が始まった。この活動によって、行政の制度ではない法人間での交流の取り組みを地域に向け発信している。当施設の障がい児と保育所の児童との交流が、障がい児・者への理解を広げる大きな効果が将来にもたらされることを期待している。

能本県

社会福祉法人 肥後自活団

〒862-0970 熊本県熊本市渡鹿8-16-46 TEL: 096-364-0070 FAX: 096-366-0290

◇法人設立年

明治25年(社会福祉法人への組織変更は昭和27年)

◇法人実施事業

- ①経営施設(事業)数:2施設6事業
- ②経営施設・事業の種類:

施設入所支援…2(知的障害児施設、知的障害者更生施設)、生活介護…1、生活訓練…1、 短期入所…1、日中一時支援…1

◇法人の理念・経営方針

社会福祉事業を確実に、効果的かつ適正に行い、自主的にその提供をする。

福祉サービスの質の向上並びに事業経営の透明性の確保を図るものとする。

◇取り組みを実施している施設の概要

【施設名】

大江学園

【施設種別及び利用定員】 知的障害児施設 70名

◇活動内容

- ○活動開始年 平成21年4月
- ○活動の対象者 地域の保育園児(年長・年中)、学園入所未就 学児、日中一時利用者(未就学児)
- ○活動の頻度・時間 月に2回程度、1回あたり3時間程度

◇活動実施の背景、実施にいたった理由

社会情勢の変化により子どもたちを取り巻く環境も変わり、当施設にも緊急性・養護性の高い子どもたち(特に幼児)の入所が増えてきた。そこで保育日課の導入に取り組み始めたが、保育所・幼稚園に近いカリキュラムを作り、特性に合ったオリジナルの手法を見出しながらも、いくつかの課題にぶつかってしまう。当施設内の保育活動では、経験や体験といった発達面での刺激が不足し、ある一定のところで発達が緩やかになってしまう傾向がある。また、地域の小学校の特別支援学級に通学する子どもたちのことを地域で理解してもらう必要性も見えてきた。就学前の子どもたちに、情操教育の一環として「障がい」を伝えていく施設としての役割があることを痛感した。

同じ頃、交流先の保育所では発達障害等の対応の難しい子 どもの存在が増えてきているにもかかわらず、保護者への伝 達・介入が上手くいかずに「障がい」に対する早期の発見・ 教育が遅れがちであるといった問題を抱えていた。お互いが それぞれの持つ長所を活かし、それぞれの課題を補う形態で の交流保育を開始していくこととなった。

◇実施内容

①芋掘り

当施設には地域に開放している広い面積の芋畑がある。そこを利用してお互いの園の子どもたちが芋掘りによる交流を行う。掘ったとれたての芋を給食室へ運び調理し、栄養士による食育と結びつける。

②プール活動

水遊び・宝探しなどを活動の中に取り入れている。水への恐怖心を取り除き、交流先の保育所の先生が保育リーダーとなり、園児がビート板を使って手本を見せることで、水に顔をつけられなかった学園の子ども達が次々に挑戦しクリアしていく姿が見られた。改めて同年齢のモデルが必要であることを感じる。

③リトミックサーキット

体育館で平均台・マット・跳び箱・はしご・滑り台を使い、サーキットを行う。学園の子どもたちが平均台・跳び箱で躊躇している場面では、保育所の子どもたちが手をさしのべるといった場面が見られる。「困っているお友達がいたら、みんなが少しお手伝いをしてくれることで、学園の子どもたちはみんなと同じことができる。」ということを伝え、障がいに対する理解を深めている。

◇活動効果(利用者や職員、地域などの反応、影響)

当施設の子どもたちにとっては、不足していた 経験を得る機会となり、同年齢の子どもたちと接 することでさまざまな場面で惹きつけられ、「自 分もやってみたい!」と意欲的になるなど「挑戦 をする」という気持ちが芽生え、実行することで 達成感や満足感を獲得でき、自信へとつながって いく姿が見られた。職員にとっては、保育の幅が 広がり内容を充実させることができるようにな り、奥行きのある保育へとつながっている。

保育所の子どもたちには、ごく自然な思いやりの心が養われ、障がいがある方への正しい理解が自然に身につき、小学校入学前の子どもたちの「当たり前の光景」として障がいを受け入れることができる人格の形成に大きく役立っている。保育所の先生にとっては、クラスの中に存在する対応の難しい幼児に対して、より工夫を凝らして接することができるようになったとのことである。

また、保育所より発行しているお便りに当施設 のことを記載していただいていることや、当施設 を利用してくださる日中一時の利用者の方たちに よって、この交流保育の活動も徐々に地域に浸透 してきている。

◇今後の展開

当法人は、これからも地域のさまざまなニーズに対応し、地域に住む障がいのある子どもたちとその保護者の方がたの相談窓口的な役割を担っていきたい。また、各通園施設や保育所、幼稚園と併用される方も増えつつあり、早期の療育にも携わっていけたらと考えている。

「大江学園に相談すればなんとかなる。」と言っていただけるような施設に発展していきたい。小学校・中学校・高校でも行われている交流の取り組みを、制度上ではなく法人間で幼児期から早期

に行っていくことで、障がいのある子ども達が社会で暮らしていくことが何も特別ではない「当たり前の光景」として、子ども達の胸に刻まれるようになれば幸いである。





◇主な経費や財源及び人員等

・取り組みにかかわった職員数 約10名 (職種等:保育士、看護師、職業指導員、栄養士)